インタビュー

フリーで生きる

ライター　森絹江さん

アイレックの文章講座でおなじみの森さん。本職はフリーのライターです。女性の多様な生き方を考えるにあたり、会社組織に属さずに仕事をすることや、子育てなどの経験談を伺いました。

スタートは地域新聞の記者

森さんの「書く仕事」は、地域の新聞社から始まりました。それまでの仕事を妊娠して解雇されたところに求人に出会い、事務職のつもりで応募。入社してみると、記者の名刺が用意されていました。「面接に子どもの保育園でつくった文集を持参したからかもしれません。初めから書いて食べていこうと考えていたわけではないんですよ」。

ところが、その新聞社が倒産。今度は嘱託の原稿制作者として職に就きますが、十分な収入は得られませんでした。別の仕事先を探すも「年齢」「女性」「子持ち」の壁は厚く、容易には見つかりません。「履歴書を30通くらい出して、面接まで行き着くのは2～3件、仕事につながるのは1件。財布のお金は底をつき、帰りの交通費もないのに、面接を受けに行ったこともありました」。

今は憧れる人も多い、フリーライターという職業。しかし当時は、内職のようなものだったそうです。大黒柱として、家計を支えていた森さんは「とにかく、食べていくのに必死でした。その後、仕事が継続するようになった編集プロダクションには、シングルマザーの人がたくさんいましたよ」と振り返ります。

ネットワークをつくる

フリーの仕事には、人脈が不可欠。その人脈は「つくるもの」と森さんは言います。人に興味を持って、自分から関わること。たとえば原稿を渡すときに少しでも雑談すると、少しずつ関係ができていくそうです。

子育てをしていた頃の睡眠時間は、毎日3時間程度。「やりたいことがいっぱいあって、欲張りなのかも」。そのうちに、働く女性のネットワークをつくろうと思い立ちます。「夕方、保育園に子どもを迎えに来てバタバタと帰る姿に、疑問を抱いていたんです。なぜ急ぐのかと聞くと、子どもや夫の食事や世話のためという。女性も働いているのは同じなのに、おかしいですよね」。

そこで、森さんは「預けっこ」から始めます。自分の子どもを、誰かに預けてみる。そして次は、その人の子どもを預かる。「先に私が助けてもらっているので、相手も自然に『預かって』と言ってくれるんです」。そこから広がったつながりは、女性の生き方を考える読書会に発展。やがて10人以上の会になりました。「皆と語り合いたいと思って。オープンマインドでやると、案外答えてくれる。本当は皆、人とつながりたいと思っているのではないでしょうか。深く付き合えば軋轢（あつれき）も生まれるけれど、それを恐れていたら関係はつくれません」。ネットワークとは、すなわち「気取らない友だち」と、森さんは言います。

人生を楽しむ

ところで、森さんの文章講座は、丁寧な指導が毎年好評です。忙しいにもかかわらず、受講生の課題文すべてに、温かみ溢れる添削と助言がなされています。「原稿を何度も読んでいると、助詞の使い方一つにも、その人の思いを感じてしまうんですよ。これって愛かも」と、ちょっと照れて笑う森さん。仕事や人、人生そのものを愛しているように見受けられます。「人生は、出会うようになっている、と感じます。嫌な出会いもありますが、本当に嫌なら捨てればいい。迷ったら、自分はどうしたいのかを考えてみることです。人生は、楽しまないと。好きでやったことなら、そのときはつらくてもあとから楽しかったと思えます。頑張ったね、楽しかったね、と」。

経験したからわかること

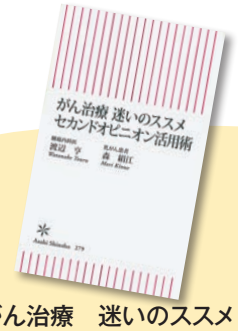
森さんは、数年前にがんの手術を受けました。今も定期的な通院を続けています。この頃は、友人からがん相談を受けることも多いそう。「つらい経験は、してみなければわからない。なんでも糧になると思います」。自身が入院したときには、やはり友人が病室に通ってくれたとのこと。「友だちのありがたさを感じました。ネットワークは大切ですね」。

今後の夢は？

挑戦したいことは？と聞くと、「せっかくがんになったので、がんの人に役立つ本をもう一冊書きたい」。

人とのつながりが、森さんの大きな力になっていることを感じました。どんな生き方をする人にも、ネットワークは欠かせないものなのかもしれませんね。

（福田）



がん治療　迷いのススメ
セカンドオピニオン活用術
渡辺 亨・森 絹江著　朝日新聞出版

「がんになったら迷ったほうがいい」。治療への不安や、セカンドオピニオンについて、医師と患者の立場から書かれた一冊です。